

中山間地域におけるスポーツイベントの

効果と課題に関する考察

～スポーツ雪合戦参加者の地域愛着度に着目して～

岡崎祐介¹⁾ 徳川竜馬²⁾ 難波江美菜³⁾

A Study on the Effects and Challenges of Sports Events in Mountainous and Hilly Areas —Focusing on the Regional Attachment of Participants in Competitive Snowball Fights—

Yusuke OKAZAKI¹⁾, Ryoma TOKUGAWA²⁾, Mina NABAE³⁾

抄録

本研究では、島根県雪合戦大会（夏の陣）2022 の選手および運営スタッフを対象に、大会への参加理由や大会満足度および地域への愛着度を分析することから、雪合戦（YUKIGASSEN）がより広く普及、発展することで地域振興やまちづくりに与える影響について検討する基礎資料を得ることを目的とした。

調査内容は、先森ら（2014）や柴田（2012）の先行研究を参考に、対象者の基本的属性を問う項目、大会への参加理由、大会満足度、旭町への地域愛着を問う項目等を設けた。

その結果、①大会参加の理由には「地元開催であること」や「雪合戦を普及させたい」という参加者の想いがあること、②選手よりも運営兼選手の方が旭町への地域愛着が強い傾向にあること、③課題や改善点には「選手およびチーム数の確保」や「運営・資金面」に関する記述が多いことが明らかとなった。スポーツイベントの開催には多くの課題があるが、継続的な開催に繋げていくためには、イベント当日だけではなく、年間を通じた大会会場の整備やボランティア体制の確立、運営資金の一部を地元企業の協賛金やクラウドファンディングで確保することなど、地域の良さを活かしながら外部と連携する形で「資金・人材・戦略」を多角的に組み合わせるイベント設計が鍵になってくると考える。

今後はさまざまなスポーツイベントの事例と比較することから、スポーツ雪合戦において地域性を損なわずに継続できる運営体制のあり方を検討していくことが求められる。

KEY WORDS: 中山間地域、スポーツイベント、雪合戦、地域愛着、地域振興

1) 至誠館大学現代社会学部 〒758-0011 山口県萩市椿東浦田 5000 番地
Department of Contemporary Sociology, Shiseikan University, 5000 urata, Chinto, Hagi, Yamaguchi, Japan

2) 株式会社 GENESIS 〒805-0045 福岡県北九州市八幡東区河内 3 丁目 4-16
GENESIS Co. Ltd. 3-4-16 Kawachi, Yahatahigashi, Kitakyushu, Fukuoka, Japan

3) 志免町立志免中学校 〒811-2245 福岡県糟屋郡志免町片峰 4 丁目 3-1
Shime Junior High School, 4-3-1 Katamine, Shime, Kasuya, Fukuoka, Japan

1. 緒言

1-1 研究の背景

2025 年 2 月末、第 36 回昭和新山国際雪合戦大会が北海道有珠郡壮瞥町で開催された。北海道の名所として洞爺湖や昭和新山が広く知られている一方で、これらを有する壮瞥町の知名度が低かったことから、町民が地域を盛り上げるスポーツイベントとして雪合戦（YUKIGASSEN）に力を入れたことがこの大会のはじまりであると言われている（松野ら，2009）。また松野らは、この昭和新山国際雪合戦大会は単なるスポーツイベントではなく、その実施の過程を通じて、まちづくりの中核を担う人々の育成に寄与していると述べている。

スポーツイベントとまちづくりに関しては、スポーツ庁が 2022 年に公表した「第 3 期スポーツ基本計画」でも、その施策のひとつとして「スポーツによる地方創生、まちづくり」が位置づけられている。山口ら（2018）は、スポーツイベントには主催者と参加者、観戦者、ボランティアの行動パターンやライフスタイル、生活の質、価値観を変化させる効果があると報告している。さらに和田（2021）は、イベント参加型スポーツツーリズムは地域イメージの向上、住民の愛着や誇りの高まり、住民参加の促進などの効果を得やすいと述べている。また、笹川スポーツ財団は、自治体や地域のスポーツ組織と共同でスポーツによるまちづくりを推進している。具体的には、住民の健康増進・健康づくりによるまちづくりの事例やスポーツイベントを活用した経済活性化の事例、スポーツ資源を最大化したまちづくりの事例などを公表している。

このように、スポーツによるまちづくりは地域のもつさまざまな資源を有効に活用しながら住民のアイデアのもと多様な取り組みが実践されており、その必要性や有効性は多角的な視点から検証され続けている。

一方で、雪合戦大会と地域活性化に関する研究では、先述した松野らの昭和新山国際雪合戦大会に関する研究のほか、山下（2009）による高野町雪合戦大会（広島県）に関する研究などがあるが、スポーツイベントとして雪合戦大会を研究対象としているものは決して多くない。また、参加者の雪合戦大会への参加理由や大会満足度と地域愛着の視点から地域振興やまちづくりについて検証することは、雪合戦（YUKIGASSEN）の発展や地域の活性化に取り組む

うえで有益なものであると考える。

そこで本研究では、島根県雪合戦大会（夏の陣）2022 の参加者を対象に、大会への参加理由や大会満足度および地域への愛着度を分析することから、雪合戦（YUKIGASSEN）がより広く普及、発展することで地域振興やまちづくりに与える影響について検討する基礎資料を得ることを目的とする。

1-2 島根県浜田市旭町の概要

旭町は平成 17 年 10 月 1 日に、浜田市、金城町、旭町、弥栄村、三隅町の 5 市町村が合併し、新「浜田市」の一地域となった。浜田市の大部分が丘陵地や山地で、中国山地が日本海まで迫り、切り立ったリアス式地形と砂丘海岸の織り成す海岸線は、優れた自然景観と天然の良港をもたらしている（浜田市，2025）。

その中で旭町は島根県屈指の「赤梨」の産地であり、旭温泉や旭町内を流れる川にはホテルの鑑賞スポットが点在するなど自然豊かな地域である。冬には山間部を中心に積雪があり、毎年 1 月には島根県雪合戦大会（冬の陣）、7 月には島根県雪合戦大会（夏の陣）が開催されている（浜田市観光協会，2025）。



図 1 島根県浜田市旭町の簡易地図

1-3 スポーツ雪合戦のはじまりと旭町の取り組み

1988 年に日本国内ではじめてスポーツ雪合戦のルールが制定され、翌年に北海道で国内初の大会とな

る第1回昭和新山国際雪合戦が開催された。1993年には日本雪合戦連盟が設立し、その後、フィンランドをはじめ世界各国に連盟が発足していった（雪合戦、2025）。

一方、島根県浜田市旭町では、1998年に旭町商工会議所青年部を中心に地元関係者で大会実行委員会を組織し、全国で11番目となる「島根県雪合戦連盟」を設立した。その年の4月に日本雪合戦連盟に加盟し、8月に「第1回島根県雪合戦大会夏の陣」、翌年1月に「第1回島根県雪合戦大会冬の陣」を開催した（島根県雪合戦大会、2025）。

下記は島根県雪合戦連盟の理念・目的・目標である。

- ①これまでの地域振興を阻害してきた雪を逆手にとって「スキー、温泉、梨、桃と雪合戦の里あさひ」として地域の進行に寄与するイベントとする。
- ②雪の魅力、美しい景観や豊かな自然にふれ、心身をリフレッシュし、心を一つにして熱中する喜びを感じながら、大いに交流を深める。
- ③冬の島根を代表するイベントに成長させ、雪を有した交流人口と地域振興の活性化につなげる。
- ④雪合戦が職場や年齢、地域などの枠を超えたスポーツとして県内外に浸透し、スポーツ競技としての雪合戦として盛り上げることで、地域の振興に貢献できるように取り組む。



2. 研究の方法

2-1 調査対象者および調査期間

本調査の対象者は2022年7月18日（月・祝）に開催された島根県雪合戦大会（夏の陣）2022の選手および運営スタッフである。調査期間および内容は大会当日である7月18日から8月上旬にかけてGoogle Formsによるオンライン調査を行い、調査項目に不備なく回答のあった24名を分析対象とした。

2-2 調査内容

調査内容は、先森ら（2014）の研究を参考に、独自に作成した基本的属性を問う項目（10項目）、大会への参加理由、大会満足度に加え、スポーツ雪合戦の魅力と大会運営における課題や改善点について自由記述で回答を求めた。また、柴田（2012）の先行研究を参考に一部項目を修正し、地域愛着（8項目・5段階尺度：「大いにあてはまる」～「全くあてはまらない」）に関する項目を設けた。

2-3 分析方法および統計処理

分析にあたって、回答者の基本的属性、大会への参加理由、大会満足度は単純集計でまとめた。雪合戦大会の魅力と大会運営における課題や改善点については、回答の主旨を変えないように共同研究者間で十分な協議をしながら同様の意味をもつ回答ごとにカテゴリーを分類しまとめた。

地域愛着は、まず性別、出身地（市内外）、参加形態、周知意識の4項目についてそれぞれ t 検定を行った。さらに年代、競技年数、練習頻度の3項目については平均値を算出し上位群と下位群の2群に分類してから、それぞれ t 検定を行うことで参加者の旭町に対する愛着度について分析した。いずれの場合も危険率5%未満をもって有意とした。統計処理にはSPSS Statics Base Ver23を使用した。

2-4 倫理的配慮

個人情報保護の観点から、口頭および書面にて本調査の目的を説明した。さらに、回答は匿名のため個人が特定されることはなく、本調査によっていかなる不利益も被ることはないことを伝え、同意があった場合のみ調査フォームへの入力を依頼した。

表1 回答者の基本的属性

項 目	尺 度	n	%	項 目	尺 度	n	%
性 別	男性	15	62.5	練習頻度	週2～4回	5	20.8
	女性	9	37.5		週1回	8	33.3
年 代					ほとんどしない	11	45.8
	10歳代	5	20.8	雪合戦大会への出場回数	10回以上	2	8.3
	20歳代	2	8.3		2～4回	19	79.2
	30歳代	3	12.5		1回	3	12.5
	40歳代	12	50.0	雪合戦をはじめたきっかけ	体力や健康の保持増進のため	2	8.3
	50歳代	2	8.3		友人や知人に誘われたため	10	41.7
居 住 地	浜田市	18	75		雪合戦が好きのため	18	75.0
	松江市	2	8.3		地元開催のため	8	33.3
	出雲市	1	4.2		競技力の向上のため	3	12.5
	江津市	3	12.5		やってみたいと思ったから	1	4.2
職 業	中学生・高校生	1	4.2	スポーツ雪合戦の周知懸念	広めたい	18	75.0
	大学生・専門学校生	1	4.2		やや広めたい	4	16.7
	自営業	1	4.2		どちらともいえない	2	8.3
	公務員	4	16.7	次回大会への参加意図	参加したい	22	91.7
	会社員	13	54.2		あまり参加したくない	1	4.2
	その他	3	12.5		参加したくない	1	4.2
競技年数	10年以上	14	58.3				
	5年以上10年未満	7	29.2				
	1年以上5年未満	2	8.3				
	1年未満	1	4.2				

3. 結果および考察

3-1 回答者の基本的属性

表1は回答者の基本的属性を示している。表1のとおり、性別は「男性」が62.5% ($n=15$)、「女性」が37.5% ($n=9$)であった。年代は「40歳代」が50.0% ($n=12$)で最も多く、次いで「10歳代」が20.8% ($n=5$)であった。

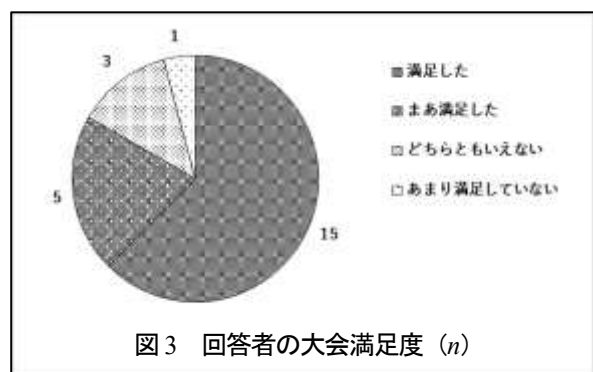
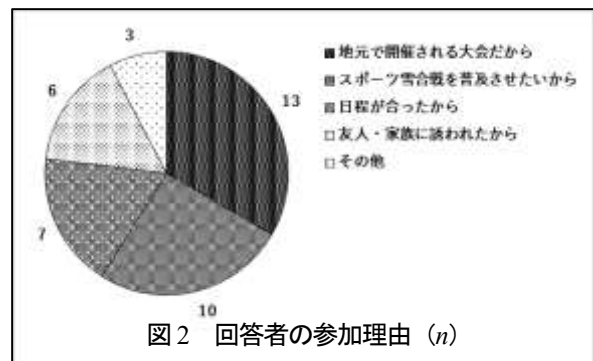
競技年数は「10年以上」が58.3% ($n=14$)で最も多く、次いで「5年以上10年未満」が29.2% ($n=7$)であった。なお、雪合戦をはじめたきっかけは5つの選択肢から複数回答を求めたところ、総回答数42のうち「雪合戦が好きのため」が40.0% ($n=18$)で最も多く、次いで「友人や知人に誘われたため」が23.8% ($n=10$)、「地元開催のため」が19.0% ($n=8$)の順であった。

3-2 大会への参加理由と大会満足度

図2は、回答者の大会への参加理由を示している。参加理由は6つの選択肢から複数回答を求めた。総回答数39のうち「地元で開催される大会だから」が33.3% ($n=13$)で最も多く、次いで「スポーツ雪合戦を普及させたいから」が25.6% ($n=10$)、「日程が合

ったから」が17.9% ($n=7$)の順であった。

図3は、回答者の大会満足度を示している。大会満足度は「5：満足した」～「1：満足しなかった」までの5段階尺度で回答を求めた。図3のとおり、「満足した」が62.5% ($n=15$)で最も多く、次いで、「ま



あ満足した」が20.8% ($n=5$)であり、参加者の8割以上が大会に満足していたことがわかった。

3-3 回答者の旭町に対する地域愛着の比較

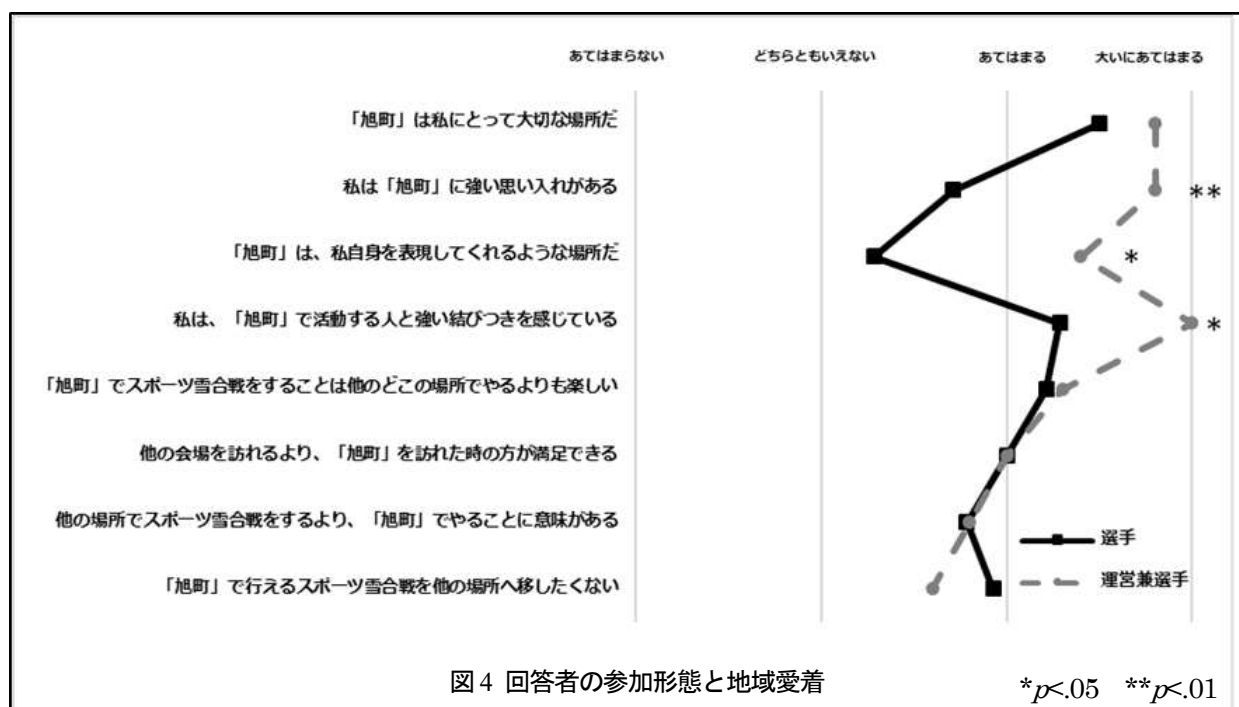
図4は、回答者の参加形態〔選手 $n=14$ 、運営兼選手 $n=10$ 〕による地域愛着の比較である。対応のない t 検定の結果、「私は旭町に強い思い入れがある」〔選手（平均3.71, $SD=1.07$ ）、運営兼選手（平均4.80, $SD=0.63$ 〕、($t(22)=3.11$, $p=0.005$)、「旭町は、私自身を表現してくれるような場所だ」〔選手（平均3.29, $SD=1.27$ ）、運営兼選手（平均4.40, $SD=0.84$ 〕、($t(22)=2.59$, $p=0.017$)「私は、旭町で活動する人と強い結びつきを感じている」〔選手（平均4.29, $SD=0.99$ ）、運営兼選手（平均5.00, $SD=0.00$ 〕、($t(22)=2.69$, $p=0.019$)の3項目において、選手よりも運営兼選手の平均値の方が有意に高い値を示した。つまり、運営兼選手の方が旭町への愛着が強い傾向にあるという結果となった。

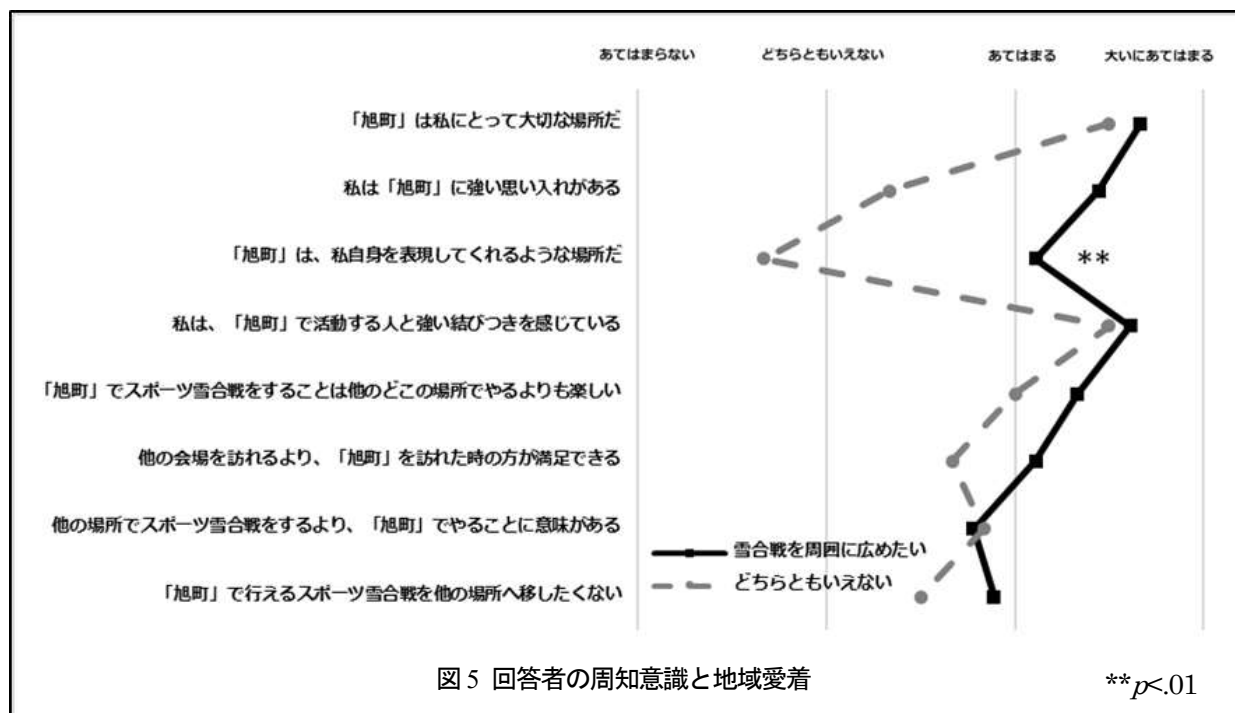
引地ら(2009)は、景観整備やイベント・祭りなどを積極的に実行することで、地域への愛着形成が促されると報告している。このことから、地域住民が雪合戦(YUKIGASSEN)に関わるような仕組みづくりや、他市および他県から来た参加者と共同で作上げる参加型イベントにしていくことで旭町に対する愛着がより形成され、地域の活性化につながるのではないかと考える。一方で、「スポーツ雪合戦をほかの場所に移したくない」という項目では、運営兼選手よりも選手の方が高い値を示した。今回の参加

者は約7割が旭町に居住していることから、経済的にも時間的にも選手にとっては大会に参加しやすい環境にあることが影響していると思われる。一方で運営兼選手にとっては事前準備や大会当日の進行を考えると競技だけに集中できる環境ではない。とりわけ大会運営に支障をきたすことがない程度の人的資源の確保など、運営上の課題改善に向けて取り組むことが今後の継続的な雪合戦大会の実施を可能にすると考える。

図5は、回答者の周知意識〔雪合戦を周囲に広めたい $n=18$ 、どちらともいえない $n=6$ 〕による地域愛着の比較である。対応のない t 検定の結果、「旭町は、私自身を表現してくれるような場所だ」〔雪合戦を周囲に広めたい（平均4.11, $SD=1.13$ ）、どちらともいえない（平均2.67, $SD=0.82$ 〕、($t(22)=3.38$, $p=0.005$)において、選手よりも運営兼選手の平均値の方が有意に高い値を示した。

これまでの研究により「地域愛着」については、「地域依存性（ある特定の場所が、代替の場所と比べて個人のニーズをどれくらい満足させるのかという知覚レベル）」と「地域同一性（ある特定の場所に対する態度、価値、思考、信念、意義、行動傾向の組み合わせによって特徴づけられる感情的な愛着レベル）」という構成要素から説明されている(二宮, 2010)。柴田(2012)によるスポーツツーリストのスポーツイベント再参加要因と開催地に対する愛着の関係を分析した研究では、5つの再参加要因のうち「開催地魅力」が「地域依存性」へ、「結び付き」が「地域同





一性」へ有意な影響を与えていることが明らかにしている。

島根県雪合戦連盟のように雪合戦大会を実施している団体や自治体は日本国内にいくつかあるが、その中で旭町に魅力を感じ、旭町だからこそ参加したいと感じてもらえることは主催者や開催地にとって重要なものである。そのような結び付きを築いていくことが継続的な参加者確保に繋がるだけでなく、スポーツイベントによる地域振興やまちづくりの実現を可能にしていくのではないかと考える。

3-4 島根県雪合戦大会（夏の陣）に対する自由記述

表2は、回答者の島根県雪合戦大会（夏の陣）2022に対する魅力や課題および改善点をまとめたものである。表2のとおり、大会の魅力や特徴を「交流・ふれあい」「楽しみ・やりがい」「オリジナリティ」の3つに分類した。「交流・ふれあい」では、スポーツ雪合戦は世代を超えて楽しむことができるスポーツであることや参加者同士の交流ができる貴重な機会となっているなどの意見があった。「オリジナリティ」では、雪玉で行う雪合戦とのフットワークの違いや参加に対するハードルの低さなどの意見がみられた。

一方で、課題・改善点は「選手・チーム数の確保」「運営・資金面」「その他」の3つに分類した。「選手・チーム数の確保」では、参加選手およびチームともに同じ顔ぶれが集まることが多く、初心者や女性の参加者確保に関する課題がみられた。また、大会

運営と選手を兼ねている参加者が多いことから運営面や持続的な大会の開催をするうえでの資金面での課題を指摘する意見がみられた。スポーツ雪合戦特有の意見としては、雪玉の大きさや硬さになど試合球に関するものや近隣の県（チーム）との繋がりおよびリーグ（公式戦）に関するものなどがあつた。

表2 島根県雪合戦大会（夏の陣）に対する自由記述

交流・ふれあい	大人から子どもまで楽しめる 家族のような和気あいの雰囲気 他チーム（他県）との交流がある 地元の大会ですごく楽しい チームごとの良さ・特色がある
	会場にいるみんなで大会を盛り上げている ふだん仲がいい人と熱い試合ができる
魅力・特徴	楽しみ・やりがい 年齢、職種関係なく楽しめる 勝った時に嬉しい、練習と大会での嬉しさが異なる 社会人になり仕事以外で夢中になれる 冬と違い動きやすいコートでのアグレッシブさ
	オリジナリティ 体育館で行う唯一の雪合戦 冬には味わえない雰囲気がある 冬より気軽に参加できる 各チームぎりぎりの人数
選手・チーム数の確保	チーム数の増加（特にレディース） 初心者向けのチームが増えるとうい 雪合戦を知ってもらい、体験する機会をつくる 資金面について見直す必要がある
	運営・資金面 審判、運営の人手不足、確保 選手が大会の運営も兼ねている 近隣の県との繋がりを維持していかないと開催が持続できない
課題・改善点	その他 試合で使う球の種類 コロナ対策 開催時期の検討 参加リーグの選択権

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、島根県雪合戦大会（夏の陣）2022の参加者を対象に、大会への参加理由や満足度および地域への愛着度を分析することから、雪合戦（YUKIGASSEN）がより広く普及、発展し地域振興

やまちづくりに与える影響について検討する基礎資料を得ることであった。そこで、大会への参加者を対象に Google Forms によるオンライン調査を実施した。分析によって得られた主な結果は以下のとおりである。

- 1) 大会への参加理由においては、主に「地元開催であること」や「雪合戦を普及させたい」があり、参加者の約 8 割が大会に満足したと回答していた
- 2) 参加形態による地域愛着においては、選手よりも運営兼選手の方が旭町への地域愛着が強い傾向にある
- 3) 自由記述では、ポジティブな意見がみられた一方で、「選手やチーム数の確保」や「運営・資金面」に関する課題や改善点に関する記述が多くみられた

島根県雪合戦連盟は 1998 年に日本雪合戦連盟に加盟をしている。初代実行委員長の「大会を通じて旭町の良さを多くの人に知ってもらえるイベントに発展させたい」という想いを継承し、現在まで 30 年近い歴史を重ねてきた。しかしながら、関係者へのヒアリングの中で、温暖化による積雪不足や参加者の高齢化、人口減少による活動人数の減少や負担の増加など運営側の悩みや課題は多い。これらは決して大会を主催している連盟だけで解決できるものではなく、自治体をはじめ地域住民と連携しながら取り組むべきものである。

柴田 (2012) は、遠方からの再参加者は単にスポーツイベントのみに満足して再度足を運んでいるとは限らないと述べている。さらに大会運営においては大会と開催地をつなぐ演出が必要であるとし、その開催地だからこそやる意味があると認識してもらうことが重要であると指摘している。つまり、雪合戦大会を開催するにあたって、他地域にない旭町のオリジナリティあるサービスを提供していくなど、大会に付加価値を付けていくことがより多くの参加者確保やまちづくりに重要であるといえる。岡安ら (2021) の「ツール・ド・おきなわ」に関する研究では、イベント当日だけではなく、年間を通じた自転車ツーリズムの整備やボランティア体制の確立、運営資金の一部を地元企業の協賛金やクラウドファンディングで確保することなど、地域の良さを活かしながら外部と連携する形で「資金・人材・戦略」を多角的に組み合わせるイベント設計が鍵になると報告している。こうした先行事例との比較を通じ

て、雪合戦イベントにおいても、地域性を損なわずに継続的な開催を可能にする運営体制のあり方を再構築することが求められる。さいごに、本研究の限界について、1 点目は本研究の対象者は島根県雪合戦大会（夏の陣）2022 の参加者のみであったため、サンプル数が少なくケーススタディであるという点である。2 点目は夏の大会のみの調査であったことから、冬の大会との比較がされておらず「雪合戦（YUKIGASSEN）」の特徴を把握することやまちづくりに与える影響について十分なデータを確保できていない点である。

これらを踏まえて、今後はより多くのサンプル数を確保することと大会参加者へのインタビューを通じた質的な調査を通して雪合戦（YUKIGASSEN）の普及および発展と、雪合戦による地域愛着の形成過程など旭町に与える影響について分析していくことが必要であると思われる。

謝辞

本研究においては、データ収集にご協力いただいた島根県雪合戦大会実行委員会およびご回答いただいた皆様に感謝の意を表します。

引用・参考文献

- 1) 浜田市
<https://www.city.hamada.shimane.jp/www/index.html>
(最終アクセス日 2025.5.2)
- 2) 浜田市観光協会 https://kankou-hamada.or.jp/content/hamada/area/index_03.php (最終アクセス日 2025.5.2)
- 3) 引地博之、青木俊明、大淵憲一 (2009) 地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—, 土木学会論文集 D, 65 (2) : 101-110.
- 4) 松野光範、横山勝彦 (2009) コミュニティ・ガバナンスによるまちづくり—昭和山国際雪合戦大会を事例に—, 同志社政策科学研究, 11 (1) : 49-60.
- 5) 松野光範、横山勝彦 (2011) まちづくりとスポーツの関係性—第 4 次壮瞥町まちづくり総合計画—を事例に—, 同志社政策科学研究, 12 (2) : 49-62.
- 6) 文部科学省 スポーツ庁 (2022) 第 3 期スポーツ基本計画
- 7) 二宮浩彰 (2010) プロスポーツ・ファンの地域愛

- 着とスポーツ観戦者行動,スポーツ産業学研究,20
(1) :97-107.
- 8) 岡安功、平野貴也 (2021) サイクルスポーツイベント参加者の大会満足度と地域愛着: ツール・ド・おきなわに着目して,生涯スポーツ学研究,17
(2) :41-52.
- 9) 先森仁、秋吉遼子、山口泰雄 (2014) 大会満足度と地域愛着が市民マラソンの再参加意図に与える影響に関する研究: 県内・県外参加者に着目して,神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,8 (1) :107-113.
- 10) 笹川スポーツ財団
<https://www.ssf.or.jp/dotank/local/index.html> (最終アクセス日 2025.5.16)
- 11) 柴田恵里香 (2012) スポーツツーリストのスポーツイベント再参加要因と開催地への愛着の関係性,SSF スポーツ政策研究,3 (1) :167-176.
- 12) 島根県雪合戦大会 <https://www.shimane-yukigassen.com/> (最終アクセス日 2025.5.16)
- 13) 和田崇 (2021) スポーツまちづくりがもたらす社会経済効果ー徳島県阿南市の「野球のまち推進事業」を事例にー,経済地理学年報,67:43-57.
- 14) 山下雅彦 (2009) 中山間地域における冬季スポーツイベントと地域活性化に関する研究ー高野町雪合戦大会の事例ー,余暇学研究,(12):39-48.
- 15) 山口志郎、押見大地、福原崇之 (2018) スポーツイベントが開催地域にもたらす効果: 先行研究の検討,体育学研究,(63):13-32.
- 16) 雪合戦 <https://www.yukigassen.jp/>
(最終アクセス日 2025.5.16)

(2025 年 7 月 14 日受理)